

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 74 号

2010年9月



第 111 回慶応山荘亜高山針葉樹林観察会

7月25日(日)に第111回観察会・慶応山荘亜高山針葉樹林観察会を実施しました。参加者は16名でした。冬に山鳥山までの観察会を実施したことがありますが、この山域での夏の観察会は初めてです。つばくろ谷駐車場で準備運動を入念に行い、出発です。登山口周辺は、ミズナラ林ですが、ダケカンバが目立ちます。オニアザミ、ヤマブキショウマに続いてミヤマホツツジの花が姿を見せました。このコースはミヤマホツツジが多く慶応山荘まで途切れることはありません。賽の河原当たりでシロバナニガナに混じてウツボグサが咲き始めていました。山鳥山まではウメガサソウやイチヤクソウ、マルバノイチヤクソウなどブナ林に植生する植物の他に、ネバリノギランやミズゴケ類など、湿地で見られる植物も混じる個所もあり、観察ポイントは豊富です。

山鳥山でカメノコテントウムシの歓迎を受けると、森はキタゴヨウとコメツガの針葉樹林帯に変化しました。部分的にクロベが混じっています。登山道沿いではオオバノツバムグラ、モミジカラマツ、オクモミジハグマがコロニー状に小群落を形成していました。井戸溝にかかる簡易橋を渡るとオオシラビソやシャクナゲの密度が濃くなります。慰霊碑を右に見てさらに進むと、ほどなく慶応山荘への入口です。ササ帯に敷かれた木道に導かれて、慶応山荘手前の鬱蒼としたクロベ林に到着です。登山道にむき出しになった根を気遣いながら大木の傍らで昼食をいただきました。



オオバノツバムグラ

第 111 回吾妻慶応山荘・亜高山針葉樹林と湿原植物観察会に参加して

五十嵐 礼子

初めまして。私は今回、高山の会の山行・観察会に初参加させていただきました五十嵐 礼子と申します。(主人とともに参加させていただきました)簡単に自己紹介させていただきます。私は福島市仁井田に住んでおります専業主婦です。この会のメンバーの佐藤和重さんとたまたま山の話をしていく中でこの会の事を聞き、参加させていただくことにしました。山行当日、集合場所に行ってみて佐藤 守さんとお会いしてビックリ！佐藤さんとは昔々職場が一緒の時期もありましたし、今いらっしゃる果樹研究所に私も勤務しておりました。本当に20数年ぶりの再会です。また奥田さんもいらっしゃるってまたまたビックリ！こちらも昔々キャノン山の会時代に友人を通じていっしょに山に連れて行っていただいたことがありました。若い時分には山にもたびたび登っていましたが、子育ても終わりようやくこの頃ぼちぼち登り始めた私ですので参加する前はちょっと不安でしたが山に行く前になつかしい人たちにお会いしてうれしくなっていました。

さて観察会のことです。不動沢登山口から登り出しました。歩き出したかと思うとすぐみなさん山道の脇に咲いている様々な花たちを見つけ出します。佐藤さんが様々な花の解説説明をされていきます。私が知っている登山とはだいぶペースが異なり少々戸惑い気味。それでも慶応山荘への登り道は樹林帯の中の登り道で、日差しも遮られ傾斜もきついことのない歩きやすい道でした。途中の沢で佐藤さんが「クロクモソウ」の群生地を教えてくださいました。その水は冷たくおいしかった。ただ残念ながらまだ開花には早い時期のようでした。しばらく登り、分岐を経て慶応山荘手前までいって昼食。皆さんからいただいたきゅうりはおいしかった。あとかわいいチマキは出色でした。ごちそうさまでした。



クロベ独特の造形美は圧巻でした

目の前の家形山に登らないで帰るのは少し残念でしたが帰りも様々な植物について教えていただきながら下りました。ただうちの

主人にいたっては皆目わからん、といった感じです。それでも植物音痴で私が知っている花の名前を教えてみても右から左に受け流すだけでさっぱりなんです。「みんな同じ緑色に見える」とか言っていました。それでも「クロクモソウ」の名前だけは覚えたようです。帰ってからネットで調べて「黒雲草」という漢字と実際に咲いている花の写真を見て納得したようです。こんどあの群生地では花が咲いている時期に登ることができればと思います。

まだまだ不慣れで高山植物については知識がとぼしい私たちですが少しずつこの世界に入っていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いします。



コースはミヤマホツツジロードでした



これだけまとまったキタゴヨウマツ、コメツガ、クロベの混生林は珍しい。井戸溝を過ぎると更にオオシラビソが加わった



ウロコミズゴケ(亜高山針葉樹林帯に群生する代表的森林性ミズゴケ)

荒川河川敷のイタチハギ大群落は何故、成立したのか 佐藤 守

この春、気になった植物にイタチハギがあります。この発端は、「赤い尻尾のような花が咲いているけどなんの木？」との嫁さんの問いかけでした。ニセアカシアの花が咲き終わった頃でしたので、すぐには思いつきませんでした。キャンノン工場裏にかかる荒川の橋の入口に穂状花を立てた株を見つけ、イタチハギであることがわかりました。独特の花の色もさることながら、外来植物というのが気になり、イタチハギの現状を調べてみました。

イタチハギは北米・メキシコ原産のマメ科イタチハギ属の落葉低木で、1912年に観賞用として渡来した外来植物です。戦後になると韓国から砂防、防風、護岸、緑化、飼料用として本格的に導入されました。特に道路の法面には緑化用として積極的に吹き付けられました。これは、イタチハギの根系が水平に伸び、細根も多く発生するため土壌緊縛力が強いこと、窒素固定能力を持つため肥料木としての効果も高いこと、生長が速く、耐暑性、耐乾性、耐陰性を備え、繁殖力も強いこと、他の緑化用植物と比較して価格が安いことなどから、経済効果が高いことが認められたためです。また、公共工事でも積極的に活用が推進された歴史があるようです。

法面でのイタチハギ導入は土壌が落ち着いた後は、周辺の在来樹木の自然繁殖により更新されることを期待したようですが、実際にはなかなかそのようにはなっていないようです。これは葉群密度が高いため、樹冠下の光条件が悪く、侵入種子が定着できないことが一因となっています。それどころか、pH2~3の強酸性地でも生育できることから、最近では、霧ヶ峰、白山等の自然度の高い亜高山帯にも侵入し、在来種と競合し問題視されています。県内でもグランドコススキー場のゴンドラ終点駅の上部ゲレンデで既にイタチハギの植生が確認されています。また、イタチハギの本来の生育地が河川敷や荒地などであることを反映して、法面から逸出したイタチハギが河川敷で大群落を形成している事例が全国各地で見られています。河川の外来植物としては同じマメ科のニセアカシア(ハリエンジュ)が定着していますが、イタチハギはクロバナエンジュの別名を持つだけに葉だけの時はハリエンジュと間違いやすいです。イタチハギは葉の裏面に腺点があることで区別します。

通勤の帰りに、橋下の河川敷に黒紫の穂が一面に広がっているのに気づきました。橋の上から確認するとイタチハギの大群落が形成されていたのです。今さらながらにイタチハギの繁殖力のすごさを見せつけられた思いがしました。河川は脆弱な生態系であり、多くの河川固有種がレッドデータブックに掲載されています。更に、流域圏という視点から見ると一帯は上流域であり、この流域でのイタチハギの群落形成は下流域に対して予測できない生態的影響を与えるのではないかと危惧されます。

荒川河川敷の大群落に驚嘆したその週末の登山帰りに、土湯の道の駅から福島方面に向かう道路わきの法面でイタチハギの吹き付け工法が施されていたことを知りました。全面が黒紫の花に被われていたのです。以前、西和賀町を訪れた際に、カタクリの会の瀬川さんが国土交通省の道路工事の法面はイタチハギだらけだとあきれていたことを思い出しました。更に絶句したのは、この法面の夏の光景です。そこはイタチハギと競うかのように特定外来生物のオオハンゴンソウが大群落を形成し、今度は黄色い花で占拠されていました。イタチハギの種子は埋土種子としてシードバンク化することも明らかになっています。イタチハギが在来種に更新されるためには20年以上を要するとの研究例があります。この事例は関西での限定的な事例です。生態的遷移は周辺環境に依存します。東北であてはまるかは未知数です。

2005年に施行された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」では、イタチハギは特定外来生物指定に至らず要注意外来生物指定に留まっています。これは、公共工事で国が推奨してきた過去が反映されているのかもしれませんが。現在では道路の法面緑化施工として在来種を活用した工法が開発され、推奨されているようですが、全国的に蔓延したイタチハギについては野放し状態です。無管理状態にあるイタチハギ対策については、公共工事として、行政が推進した以上、行政責任として早急に取り組むべき課題ではないでしょうか。



荒川河川敷に広がるイタチハギの花



イタチハギとオオハンゴンソウが優占する法面

シュンランの果実

鎌田 和子

小さい頃、私はシュンランのことをジジババとよんでいました。数年前、そのジジババに果実がなると聞いてびっくり。どんな果実なのでしょう。早く見てみたいものだ、ずうっと探していて、昨年(2009年4月)、「小鳥の森」で初めてその果実(写真①)を見つけたのです。それは想像していたより堅固な感じの果実でした。その筒状の果実は縦長に隙間が空いていました。中の種子はすでに飛んでしまったのでしょうか。振っても何も出てきません。役目を終えた空っぽの果実に、私は見とれました。

自然が造るものって、なぜにこうも美しいのでしょうか。いつの頃からか、私は、花が咲き終わった後の果実に惹かれ、果実を観察するようになりました。その結果、私なりに納得したことがあります。それは、果実が堅固なのは、種子を守り育て、是が非でも世代をつなぐ、そのための知恵であろうこと。そして、その果実たちの独特な美しさは、自然の神秘としか言いようがないことを悟ったのです。アカガシやアラカシの殻斗の色と風合いが微妙に異なることや、マンサクの本物の果実は、スズランの花の形に似ていてハッとしたことなどが思い出されます。果実はみな堅固で美しい。

話はシュンランにもどります。シュンランの果実がめったに見られないのはどうしてなのでしょう。わが家の松の木の根元にもシュンランの株があります。けれど、20 数年間、そのシュンランに果実がなったことは一度もありません。なぜ？ 受粉がうまくいかないから？ ならば人工受粉してみようか…。人工受粉の経験など全くないのに、単純な疑問を解き明かそうと、私は、シュンランに人工受粉まがいのことを試みました。そして、そのことをすっかり忘れていて、ある日、ふっと思い出し、松の木の根元を見ました。なんと、シュンランの花茎が一本だけ、枯れずにニョッキリ立っていたのです。ひょっとしたら人工受粉に成功したのかも！？ このニョッキリしたのが果実になるのかもしれない。なのに、そのとき写真を撮ってないのは、かなり興奮したのでしょうか。

何日か経ってから、写真を撮って経過を記録しなくてはと思ったのですから。そう気づいて撮ったのが写真②です。それから2週間ほど経過したのが写真③です。グリーン部分が太ってきています。人工受粉に成功したかどうかより、これから、シュンランの果実が熟していく過程を、庭先で観察できることのほうが嬉しくてたまりませんでした。



③少し太くなってきた感じ



④シュンランの果実まちがいなし！



① 「小鳥の森」で見つけたシュンランの果実



②人工受粉が成功したかな？

8月の半ばを過ぎても、果実はまだ青々したままです。でも、シュンランの果実の上部に残っていた花びらは完全に縮んで、こぶ状になり、周りにはカラスウリの葉が伸びています(写真④)。この奇跡のようなシュンランの果実が、やがて褐色になり、鞘が裂け、種子を撒き散らすのかしら！ その光景を見逃さないようにしなくてはと、今からドキドキしています。

(2010.8.17)

鹿狼山から 14 ～鹿狼山のヌサバリコ～ 小幡 仁子

今年の夏は暑かった。相馬は冬が暖かく、夏は涼しいからいいね、とよく言われるが、それは本当なのか？と思われるほど暑かった。ところで、私は夏の休暇で、家の大掃除をすることにしている。(冬は寒いから大掃除はしない)庭木の剪定から始まって、ガラス磨きや窓の拭き、カーテンの洗濯、押し入れの中、台所等、不要品は思い切って捨ててしまう。さあ、今年もやるぞと始まったが、毎日あまりにも暑くて大汗をかき、我慢の限界を超えてはお風呂に入ってアイスを食べ、お昼寝をしてしまうという繰り返しを3、4日していた。そこへ、台風と共にほんの少し涼風もやってきたのが8月13日であった。そうだ、ここしばらく鹿狼山に行っていなかったと、早速出かけることにした。

鹿狼山はすでに秋の気配がした。ダイコンソウとキツネノボタンの花は終わり、実になっていた。早速、ルーペで実を覗いてみた。ダイコンソウもキツネノボタンも実から針のような棘が出ていた。ああそうだった、こういうのを動物散布とか「引っ付き虫」とか言って、動物の毛や人の衣服にくっついて種を遠くに運ぶのだった、と思い出した。そういえば、西和賀のカタクリの会に参加したとき、こういう「引っ付き虫」を何と言うのかが話題になった。福島県人と宮城県人は「バカ」、岩手県人は「ドロボー」と言っていた。私も子どもの頃は、この手の実を友達の背中に投げつけて「バカが付いてる。ヤーイ！」などとはやしたてて遊んだものである。その時に、秋田県人が「ほれは、おら方ではヌサバリコっつうんだ」と言った。「はあ、ヌサバリコですか？フランス語みたいですねえ」と一同初めて聞く言葉に感心した。ヌの発音がノに近いような鼻に抜ける音だった。

後で秋田県出身の同僚に聞いてみたら、服にそんな実が付くと確かに「ヌサバリコくっ付いている」と言ひ、それから、子どもが大人に甘えてべたべたくっ付いたりすることも「ヌサバル」って言うんです。それに秋田では、言葉の最後によく「～コ」と付けますから。ということだった。そうすると、ヌサバリコというのは、言葉の意味そのものが名前になっているので、私たちが「バカ」と呼んでいるよりずっと筋が通っているわけである。それに「バカ」や「ドロボー」と言うより、「ヌサバリコ」と言う方がずっと聞こえがいいように思われた。

(ふ～む。これから鹿狼山では「引っ付き虫」を「ヌサバリコ」と呼ぼう。)

さて、ダイコンソウの実をよく見てみると、棘の先端にもう一つ付属物があり、キツネノボタンの方は棘の先がそのまま鉤状になっている。この差は何だろうと素朴な疑問がわいたのでネットで調べてみたら、驚くべきことが分かった。

「ダイコンソウの実・・・鉤のように曲がった先にもう一度曲がった物がついていて、触っても引っかかりません。種子が熟してくると先端に付いていた物は取れてなくなり、鋭くがって鉤状になった先が服に付くようになります。種子が熟さない内に運ばれてしまっては困ります。それまでの間は何かが触れても引っかからないようになっていて、種子が熟してきたらくっつきやすい形にかわる。こんな小さな草にも、素晴らしい工夫がなされていました。・・・この棘は雌しべの花柱、種子が未熟な時に何かにくっつかないように防御していたのは柱頭でした。効率よく種子を散布してもらうための工夫だけでも素晴らしいのに、・・・受粉に必要な柱頭が実が熟するまで働き続けるというのもすごい仕組みです。」

この説明を読んで、植物の世界は実に良くできていると思った。と同時に、なぜキツネノボタンは最初から棘が鉤状なのかという素朴な疑問がわいた。きっとそのことにも理由があるのだろうが・・・。(2010/09/12)



ダイコンソウの実
棘は花柱、棘の先端の付属物は柱頭である



キツネノボタンの実
種子の先端は鉤状になっている

東北ブナ紀行 (39)

奥田 博

山形の月山、朝日連峰、飯豊連峰は国道などで寸断されているが、実際には尾根続きの峰々であり、ブナ林が延々と続いている。しかもブナの純度が高い。今回は月山さんろくの六十里越え、飯豊連峰の一角である温身平のブナを訪れてみる。

76) 六十里越え

古くから鶴岡と川西を結んでいた険しい峠道。この道沿いには湯殿山神社をはじめ、多くの神社・石塔、僧侶のミイラをまつる寺、あるいは小説「月山」の筆者森敦のゆかりの寺、古民家など、長い歴史を物語る文化遺跡が残る。この長大な道の中で、湯殿山神社から田麦俣までの間は、山道としてしっかりと残り、しかも見事なブナが随所に見られるコースになっている。

登りを避けて、湯殿山神社大鳥居から緩い下り道をたどる。湯殿山神社から流れてくる沢を渡り、山道に入る。すぐにブナ林が現れる。ところがブナの葉はスカスカだったり紅葉のように茶色だったりオカシイ。酷暑の水不足のせい、ブナシャチホコムシが食べつくしたか原因は分からない。山形はナラ枯れ被害が多く発生し、他にもミズナラなどが枯れて紅葉のように見える。笹小屋跡、一杯清水から少し登れば、細越峠となる。大きな石板や茂吉の歌碑などが要所にあって飽きさせない。やがて「千手ブナ」と立て看板のあるブナを見る。以前に和賀岳で私が「千手観音のように枝を広げて」と述べたことを思い出す。人間、誰しも考えることは同じだと思う。姿形を見れば、和賀岳のブナの方が枝を一杯に広げているように思えた。ここまで下るとブナの葉は正常で、標高1000m付近が一番やられていることが分かった。花ノ木坂まで来ると林床にユキツバキが混じる。その後国道を横断すれば、ふたたび見事なブナ林に入っていく、目を楽しませてくれる。やがて林道の七ッ滝展望所まで降りて、多層階の田麦俣民家は目の前だった。



六十里の千手ブナ

コースタイム：湯殿山神社 (50分) 笹小屋跡 (30分) 細越峠 (1時間) 千手ブナ (1時間30分) 田麦俣



77) 温身平

夏でも雪渓に覆われる石転び沢をたどって飯豊山に登るコースの取り付きにヌクミダイラと呼ばれるブナ原生林がある。その森に遊歩道を付けてブナの森を鑑賞できるようになった。ブナ見直しの現れと解釈したい。飯豊鉱泉で車道を終え、梶川尾根登山口を見送ってすぐに、見事なブナ林が展開する。ブナ以外にも太いやちダモやトチノキなど見事な木々が見られる。車を通さない林道歩きは、広々としてそぞろ歩きには



温身平の新緑ブナ

打ってつけた。所々にはブナの解説板があつて、ブナの初心者にはありがたいかな。その林道に並行する森の遊歩道をたどって戻ることができるが、この道の方が自然を身近に感じることができる。沢に沿っての平坦な道で、意外な場所に花を発見したりと楽しみながら森を歩ける場所であった。

コースタイム：飯豊山荘 (40分) 林道分岐 (40分) 飯豊山荘



キンコウカ (*Narthecium asiaticum* ユリ科キンコウカ属)

亜高山帯から高山帯の湿原を中心に群生する多年草。茂庭山塊のブナ帯上部の沢沿いの湿地でも植生が認められる。日本固有種である。DNA解析に基づくAPG植物分類体系ではユリ科から独立して、ヤマノイモ目のキンコウカ科として分類され、また、牛など動物に対して腎毒性を持つ物質を含むことが確認されるなど、近年、新たな特性が明らかにされつつある植物である。

葉は、根生葉で、アヤメの葉を小さくしたような先が尖った剣状の形をしている。基部は鞘状となって重なる。この葉は、見かけ上、中脈から折りたたまれて裏側(の性質しかもたない葉面)だけが見える状態になった単面葉である。最近、単面葉はもともと裏側の性質をきめる遺伝子しか働かないために形成されることが解明された。

花は、花茎を伸ばし、その先に総状花序を形成し10~20個の小花を着生する。小花は花被片6片、雄しべ6本、花柱(雌しべ)1個で構成される。雄しべの花糸には綿のような黄色い軟毛が密生し、その先に赤みを帯びたオレンジ色の短棒状の葯が着生する。花は下から上に向かって咲き上がる。開花すると花被片は黄金色を帯びて反転する。黄緑白の花柱を軸とした雄しべと花被片の配置の絶妙なバランスが、花火を彷彿とさせ、美しい。

名前は黄金色に光り輝く花の色に由来するというが、この花を覚えた頃は、そのイメージが単純明快で、高山とは言えない茂庭山塊の沢源頭部の滝口周辺でこの花に遭遇した時は、意外性に驚いたこともあり、一段とまぶしく見えた記憶がある。その後のたび重なる山行で、キンコウカは、集合花としてのシルエットが記憶に刷り込まれていった。しかし、2009年の夏に西和賀を訪れた際に、沢沿いで咲いていたキンコウカに向けたマクロレンズの奥では、華やかな小花が夏祭りのようににぎわっていた。そして、長い間、気づかなかったこの花の本当の美しさを発見した新鮮な感激にしばらくの間浸っていた。

フキユキノシタ (*Saxifraga japonica* ユキノシタ科ユキノシタ属)

ブナ林の溪谷沿いの岩場や礫地、滝つぼ側壁に生育する多年草。適応性が狭いのか植生地が極めて限定される植物で安達太良山系には植生しない。吾妻連峰に自生するユキノシタ属の植物はダイヤモンドソウ、クロクモソウとあわせて3種のみであるが、その中で、フキユキノシタの花が最も小さく目立たない。

葉は長い葉柄を持つ根生葉の他に花茎に着生する互生葉がある。根生葉はほぼ円形で葉縁には不規則な尖った鋸歯がある。基部はハート型に窪む。命名はこの根生葉をフキに見立てた。

花は、花茎を伸ばし、その先に円錐状の集散花序を形成し多くの小花を着生する。小花は、がく片と花弁が5枚、雄しべ10本、2心皮性を示す2個の花柱(雌しべ)で構成される。花柄とがく片、そして葯の色は赤紫でクロクモソウやヒメアオキの花の色に似る。花弁は白であるが基部に黄緑色の斑点が2個ある。斑点の形は米粒形、ひし形、四角形と不揃いであるが、この斑点がいいアクセントとなって端正な花の作りでありながら愛らしさを醸し出している。花序茎や花柄には白い縮れ毛が着生する。

フキユキノシタは高山中腹にある名瀑の周辺で大群落を形成しているが、自生地は切り立った岩壁や急斜面であり、また、瀑水が引き起こす溪谷風もたびたびで、フキユキノシタを間近で観察し、撮影できる機会はないだろうとあきらめていた。しかし、思わぬところで開花し始めたフキユキノシタに遭遇した。群生地でも遠くから眺めていた花は小さい印象であったが、開花した花を間近で見ると意外と大きく、初見でフキユキノシタと特定することにためらいを感じた。その翌日、間を入れずして再訪を促す事情に恵まれた。一期二会と言うわけである。



西吾妻登山道保全ボランティア

日時：2010年10月17日（日）6：30～16：30〔予備日：10月24日（日）〕

内容：6月に設置した誘導ロープの取り外し作業をします。天元台から入山しA班とB班に分かれて作業をします。A班は西大巓から西吾妻小屋まで、B班はかもしか展望台から西吾妻小屋までとします。

集合場所・時間：果樹研究所 6：30 参加定員 10名程度

申し込み：10月16日（土）まで佐藤守へ電話またはメールにてお願いします。

第113回自然観察会案内：立子山の里山観察会と総会

日時：2010年11月28日（日）8：00～16：30

集合場所：野鳥の森入り口駐車場 7：30 または 福島市立子山自然の家駐車場 8：00

（直接、立子山自然の家駐車場に集合される方は申込時にお知らせください）

参加定員 30名（総会は定員無し）

総会場：福島市立子山自然の家（960-1321 福島市立子山字金井作1 024-597-2951）

内容：午前中は立子山の里山の植生と人との関わりなど観察します。午後は立子山自然の家で総会です。
準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳など（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）

*その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費：保険代（300円） 申し込み：11月27日（土）まで

参加申込先：佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時までお願いします）。

会報案内

船形山のブナを守る会・会報 Vol. 10 「ブナの森」

宮城県の自然保護グループ「船形山のブナを守る会」（代表 小関俊夫）の会報を紹介します。同会は1986年に設立され、以来船形山のブナ林の保全活動を活発に展開してきました。その活動は地元の小学校の副読本に掲載されることから地元の住民から高く評価されていることがうかがえます。

今回の会報では、「コンクリートのダムと緑のダム」と題する特集が組まれています。本特集ではダム問題の中でも一般マスコミから見過されている治山ダムや水系砂防ダムに特に焦点をあて、その問題点について5人の筆者により多面的な角度から論じられています。

特集に続く自然保護に関する35名の寄稿文も充実しています。特に、奥田博さんと瀬川陽子さんは、「高山の原生林を守る会」、「カタクリの会」の活動内容に触れながら、自然保護と自然観察会の関係について論じています。また、深野稔生さんの「結ばぬ偶像、小川登喜男と船形山」は山好きなら思わず読み込んでしまう掘り出し物です。船形山からキリマンジャロまで俯瞰する豊富な編集内容は、自然に関心のある読者なら思わぬ発見があるものと思います。

会報はA5判140ページ仕立て、有償（頒価1000円）です。購入を希望する方は「船形山のブナを守る会」事務局（青沼健：TEL0229-22-2697）に直接、お申し込みください。



新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

第31回東北自然保護の集い（参加申込期限：10月15日）

シンポジウムテーマ：生物多様性の確保とこれからの自然保護運動

記念公演（財）日本自然保護協会常勤理事 横山隆一「今自然保護運動に求められるもの」他

日時：10月30日（土）～10月31日（日）（受付 30日0：15～）

場所：会場 いでは文化記念館 ☎ 0235-62-4727 宿泊 宮田坊 ☎ 0235-62-2268

主催：「出羽三山の自然を守る会」（dewacons@cameo.plala.or.jp 代表 佐久間憲生 ☎ 0235-64-3854）

参加希望者は奥田博まで連絡をお願いします（10月15日が申込期限ですので早めをお願いします）。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第74号 2010年9月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木